

カールステン・ニコライ+マルコ・ペリハン
「polar^m [ポーラーエム]」展

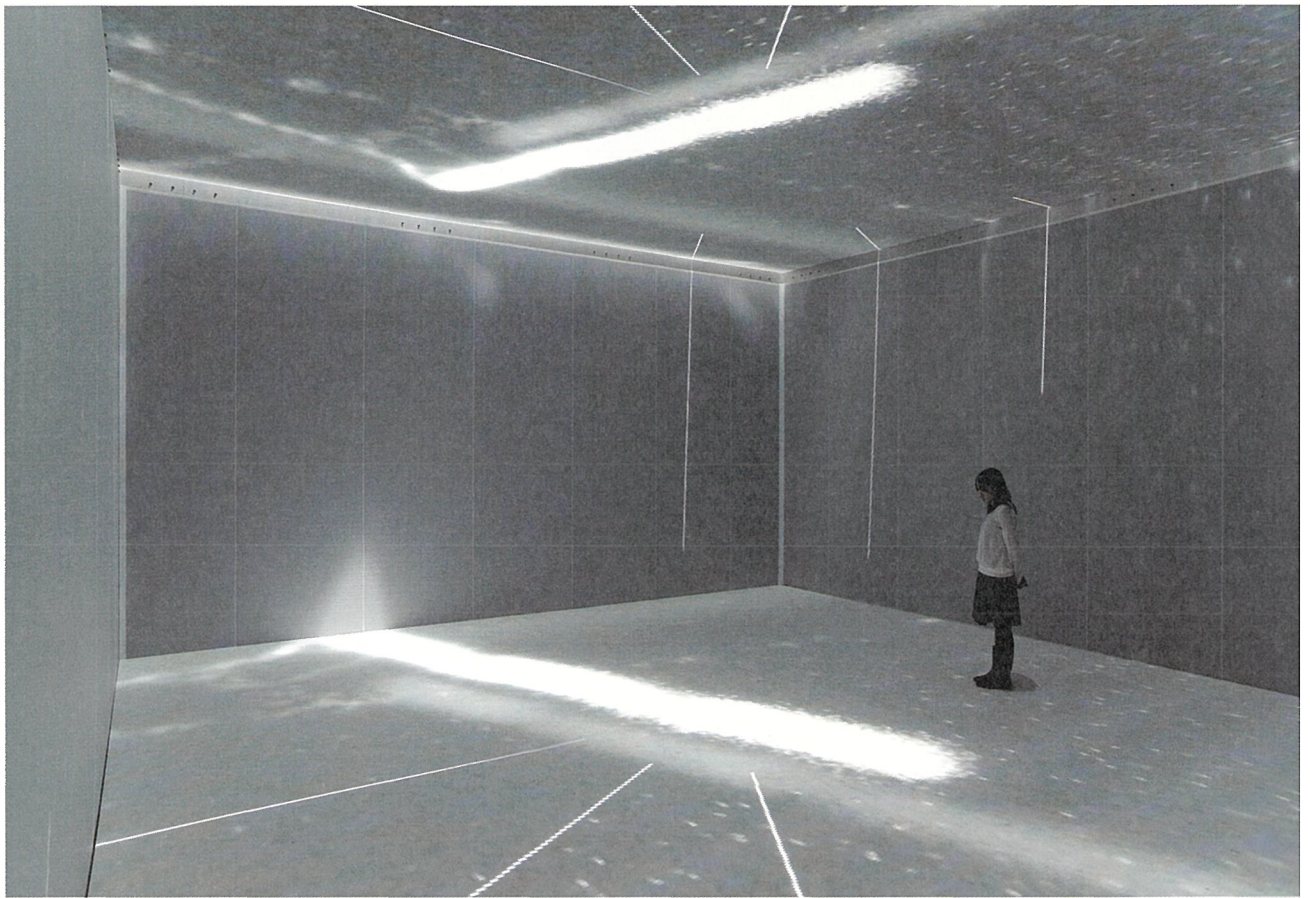
会期：2010.11.13 - 2011.2.6
会場：山口情報芸術センター

四方幸子

Carsten Nicolai + Marko Peljhan
"polar^m"

November 13, 2010 - February 6, 2011
Yamaguchi Center for Arts and Media (YCAM)

Yukiko Shikata



カールステン・ニコライ+マルコ・ベリハン
「polar[™] [ポーラーエム]」(YCAM委嘱作品/2010)

空間は、左右対称に設置された2基のキューブ状構造体(各7m四方、高さ4m)、3種類の装置、大小の花崗岩で構成されている。足を踏み入ると、生成変転する世界のだだ中に投げ込まれたかのようなのである。会場内を飛び交う電子音、キューブ全体に降り注ぐ粒子のような映像。ダイナミックな空間全体を、世界の一部を可視化したものと見なすことさえできるだろう。リアルタイムで知覚化されているのは、宇宙や地球上からたえず降り注ぐ自然放射線や人工放射線、そして空間内の花崗岩や体験者から放出される自然放射線である。

空間手前に設置された装置群は、アナログ、デジタル含む新旧のガイガーカウンターと無線受信機(電磁波の受信)、地元産出の巨大な花崗岩からの線量を計測するロボットアーム、そしてクラウドチェンバー(霧箱)である。ガイガーカウンターは、計測可能な放射線種、精度などが異なることで世界を感知する複数の層を作品に取り込み、ロボットアームは花崗岩の周囲を動き放射線量を計測している。クラウドチェンバーは、宇宙線を含む空間内の各放射線の軌跡を過飽和状態のアルコール蒸気内に異なる形状で可視化するが、接写映像が2基のキューブ状構造体を覆うようにリアルタイムで投射されることで、構造体をあたかも巨大なクラウドチェンバーのように現出させている。



1
アートラボ第10回企画展「polar」(ヒルサイド
プラザ、2000)キュレーター・アートラボ、コ・キュ
レーター：阿部一直、四方幸子。

2
ニコライは1965年旧東独、ベリハンは1969年
旧ユーゴスラヴィア(現スロヴェニア)生まれ。

3
1961年ポーランドのSF作家スタニスワフ・レム
の小説。1972年タルコフスキーが映画化。

装置群と空間奥にある2基のキューブ状構造体の間のエリアには、左右に別れて小さなキューブ状の花崗岩がそれぞれ数十個、グリッド状に整然と吊り下げられている。左半分は一律に9cmの立方体、右半分はほぼ同サイズだが不定形で、左右対称に世界の原理が分岐しているかのようである。

これら小キューブ群の対称性に連動するかのように、2基のキューブ状構造体も対称的な関係にある。キューブの内外を貫く映像は同じソースが左右反転してプロジェクションされており、周囲は8.2チャンネルの音響で覆われている。左のキューブは全面がスクリーンで遮られており体験者はクラウドチェンバーからの映像を外から観察するのみである。右は前面が開いており、体験者は変容し続ける現象を内部から体感できる——クラウドチェンバー内での、平衡感覚が揺らぐほどの体験——だけでなく、自らの身体や影によって映像や音の状況を微かながら変容させる存在としてある。

「polar^m[ポーラーエム]」(以下「polar^m」)は、2000年に発表された「polar」¹で探索されたヴィジョンの新たな展開として、10年後の2010年において同じアーティストとキュレーターにより実現したものである。「polar」は、物理現象による情報の組織化を音響、映像、インスタレーションを通して追求してきたカールステン・ニコライ、テレコミュニケーションや気象の定点観測のプロジェクトによりアートと科学、社会をつなぐ超領域的な場を開示してきたマルコ・ベリハンによる初のコラボレーションとして1999年に東京で開始された。制作にあたって彼らは、リニアで整合的な時間・空間を偏重する西側の論理とは距離を置き、ともに育った東欧(旧社会主義圏)²ならではのミクロ、マクロへと拡張／縮小されうる脱中心的世界観を共有、プロジェクトの起点として「惑星ソラリス」³における人々の想念をインタラクティブに物質化する「ソラリスの海」を選んでいく。

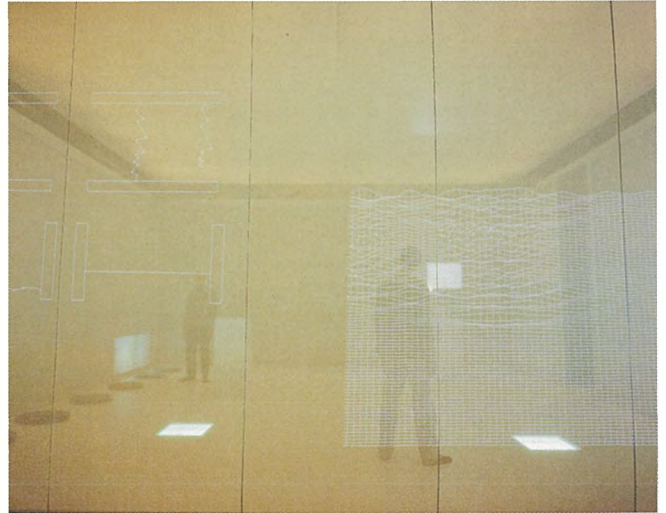
「polar」では、7m四方、高さ4mの半透明のキューブ状構造体の内部で2人の体験者が特殊なインターフェイスを手にして環境データ（映像、音、温度、重力加速度）を収集、データの傾向に応じて知的情報システムが稼働（データの検索、取得、解析、学習）、体験者とのインタラクションを介して光、映像、音、水の波紋などに反映するプロセスが実現された。

作品は、キューブ状の空間およびそれと対をなすように存在する不可視のデータ空間——マザーコンピュータ「ソラリス」が全データを統合する——との相互作用により成立している。体験者は、自らのふるまいがアルゴリズムを経て反映された空間をセンシティブに知覚することで新たなふるまいを起こしていく。とりわけ体験者とのインタラクションにより知的生命体のように成長する「ソラリス」を生み出したことが、アーティストが「polar」を一種のライフワークとして10年後にあらためて取り組む強い契機となった。

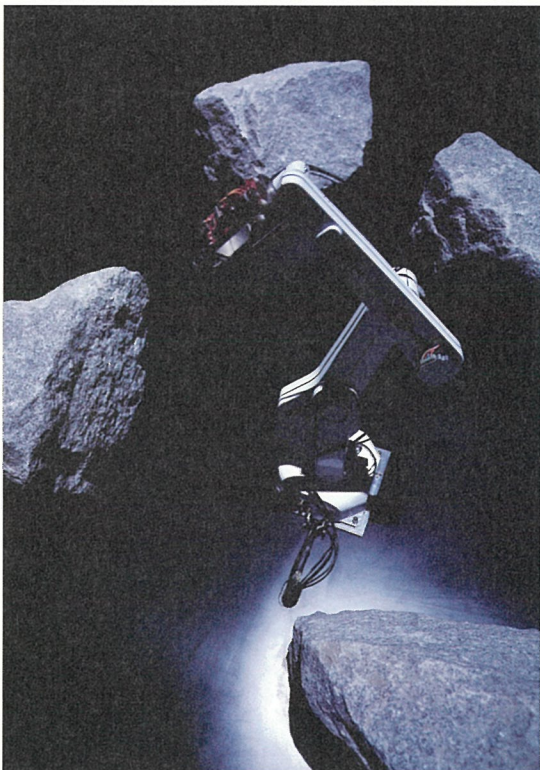
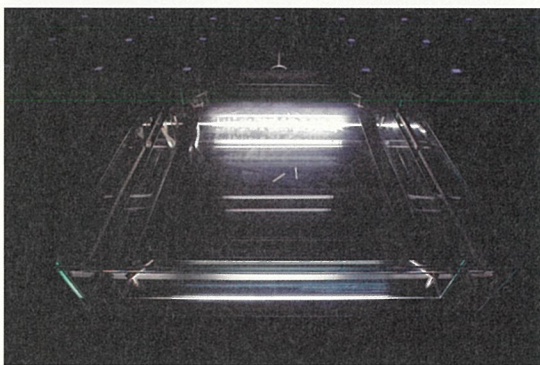
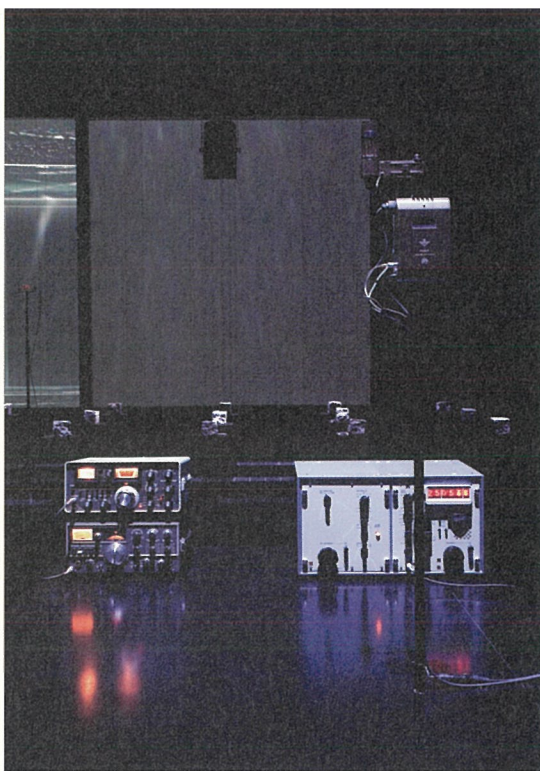
「polar」はそもそも対極性や極地、北極／南極の電磁的場場により成立する地球環境を示している。2000年の作品においては対称的な二人のアーティスト、可視／不可視的な空間の対峙を表していた。今回の「polar^m」ではキューブ状の構造体が同サイズでダブルに増殖している（「シュレーディンガーの猫」を想起させもする）。それを基軸に対称的な空間における左右の位相差——人間が操作可能な整合的世界／人間を超越した自然、外部観測的／内部観測的——が意味として新たに加わっている。

今回タイトルに追加された「m（ミラード）」は、閉じたキューブを原型とすれば、そこから派生し動的な知覚や情報の変容をもたらす開いたキューブによって表象されるはずである。ここでの「ミラードには物質的な鏡というよりむしろ情報的な現象——アモルファスかつフレキシブルに歪み変形し転移していくプロセス——が内包されている。もちろん「polar^m」が、「polar」の発展的延長としての「ミラードであることは言うまでもない。「ミラード」をまた、9.11以降の世界情勢——キリスト教圏に対する非対称性としてのイスラム教圏——の表出と解釈することも可能だろう。2000年には不可視であったものが、その10年後「ミラード」を要請したとはいえないだろうか。

「polar^m」は、さまざまな計測装置からのデータを、アルゴリズムを介することで映像や音響など知覚可能なものへと変換するシステムおよび空間である。体験者は、たえず変容する不可視の情報ランドスケープに身を置くことにより、そもそも世界がさまざまな情報で充溢したインタラクティブなものであることにあらためて気づくことになる。それは特定のインターフェイスによる恣意的なインタラクションではなく、



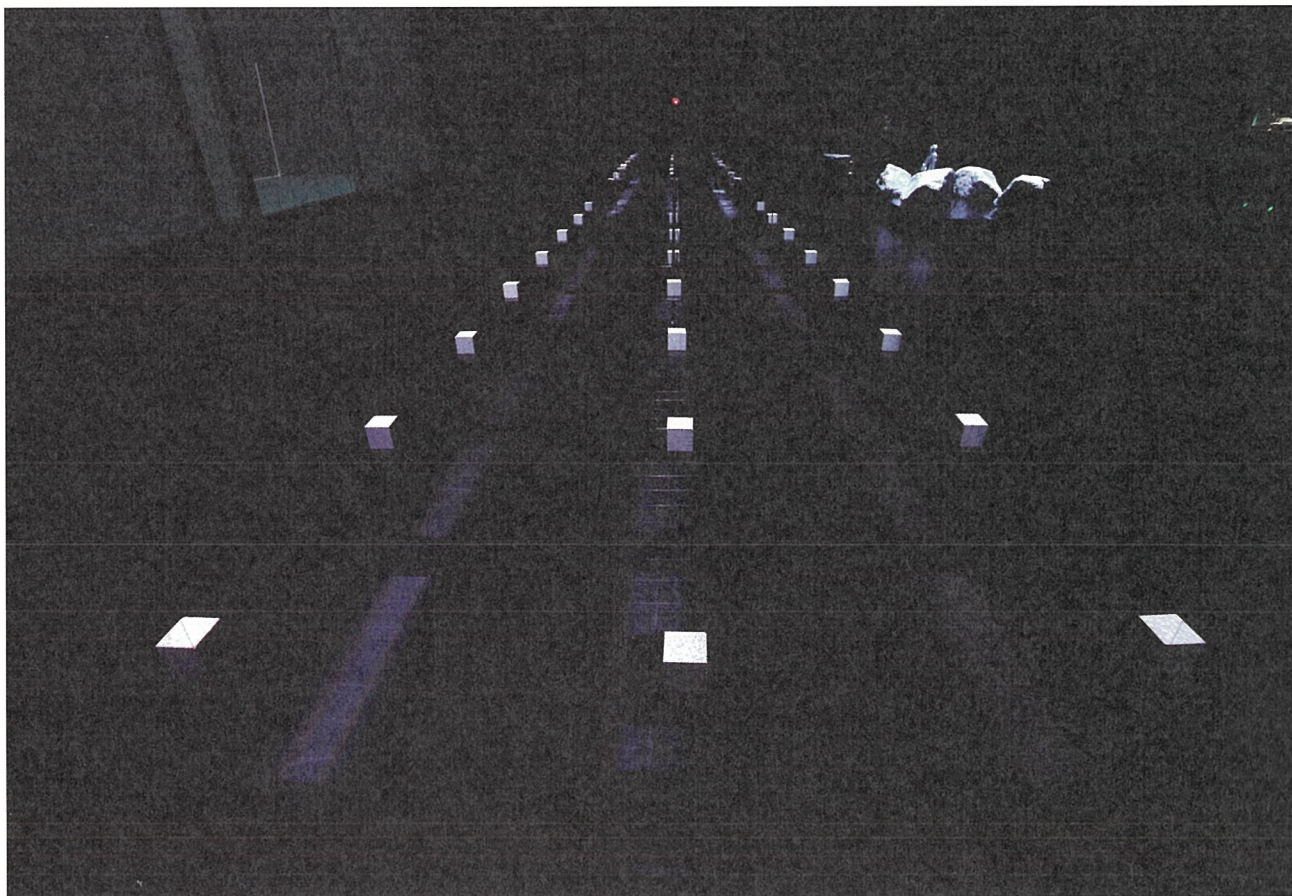
カールステン・ニコライ+マルコ・ベリハン「polar」(2000)
アートラボ第10回企画展
ヒルサイドプラザ(東京)



自らの存在も含むその場の環境の微細な気配を察することで初めて開けてくる世界との新たな関係である。

「polar^m」では、宇宙や岩石、体験者から放出される放射線が実際の空間で複雑に交差し循環する現象が、アーティストの予想を超えて生起することとなった。ガイガーカウンターのデータはロボットアームやキューブへ送信され、ロボットアームはそのデータによって稼働し、計測した花崗岩の放射線データがキューブへとフィードされる。クラウドチェンバー内の放射線の軌跡はキューブに投影され、ガイガーカウンターのデータは音響に反映されるだけでなく、キューブ内を横切る白い線分を生み出す。また体験者の存在が放射線を透過もしくは反射することで^a、空間の放射線ランドスケープに影響を及ぼす。空間全体で複数の計測・出力装置が同時に稼働し、幾層にも情報が反射し合い入れ子状になりながらループすること、それらを可視化・可聴化するプロセスを「ミラード」とみなすことができるだろう。情報ネットワークがはりめぐらされた現在、自然環境そして情報環境が相互に関係しあい、一種非対称的に「ミラード」されることで組織化、発展しうる新たな情報生態系がリアルなものとなりつつある。「polar^m」はそのような世界を私たちにいち早く可視化する。と同時にこの作品は、計測可能なデータだけでなく、むしろ計測も可視化もされえないまま存在しミラードされるデータへと目を向けていくことを喚起するものである。

「polar^m」では、宇宙や地球環境そしてインスタレーション全体が、自然放射線という現象から可視化されシームレスにつながられている。ここでは世界で生起しているダイナミックな情報プロセスがリアルタイムにフィルターされ知覚化される。それは私たちが生まれそのただ中を生きている世界を一つの空間において別の形で可視化する「システム内システム」といえよう。「polar^m」を介することで私たちは、壮大で深遠な問い——宇宙そして人間存在へ向かう——にあらためて対峙しはじめる。宇宙の一部でありながら、人間は各時代の先端技術を駆使して世界を観測しそこに潜むメカニズムの解明を対称的明晰さの中にめざしてきた。しかし「ソラリス」の探索が人間自身の非対称的複雑さとの対面であり、地球上での記憶を噴出させたように、外部への探求は内部を、マクロへの探求はミクロを、科学的探求は哲学的問いを結果的に誘導してしまう。世界や人間存在への根源的な問いは、探求するほど新たな問いを生み出し終わることがない。「polar^m」での体験は、それを実感させるとともに人間中心的なスケールや価値基準を無化しようとする感覚への誘導なのだ。



世紀の節目において、急速に広がるインターネット環境へと延長し最先端の検索・解析技術を駆使したのが「polar」であったとすれば、「polar^m」は、地球規模のネットワークや環境へのまなざしが醸成されつつある2010年代初頭において、世界そのもの——自然環境、情報環境、社会環境をつなぐ——を可視化することで、狭義のアート圏外のより普遍的な問題系へと足を踏み入れたように思われる。「polar」が体験者のふるまいによる情報環境のインタラクティブな知覚化であるとするれば、「polar^m」は、自然放射線に加えて電磁波を含む人工放射線——とりわけ20世紀以降無線やラジオにより普及し、今世紀以降に格段と密度が高まった——の存在を、むきだしの新たなランドスケープとして提示する⁵。それはこの作品が、人間を含む生物と無生物との境界を策定しない位相でのインタラクションというかつてない地平に到達したことを意味している。「polar^m」では、放射線データの側面からランドスケープが描かれる。そこでの人間は、世界や空間の諸要素とあくまで並列的な関係において可視化される存在である。「アート」や「人間」というフレームさえも取り払われ、ただ情報が相互に関係し続ける世界。生物も無生物も等価な情報としてインタラクトし循環する、地球の事象そのものへと向かうこと。その上で、人間存在そして人間と世界との関係可能性をあらためて問いかけることがここでは示唆されている。

5

会期が終了して約1ヶ月後の3月11日に東日本大震災が発生、福島第一原子力発電所事故により大量の放射線が放出された。それ以降日本では、放射線という不可視の層をかつてなく注視する日常へと移行した。20世紀以降社会に飛躍的な発展をもたらした電気・電子技術は、その対極としての負の側面（人工放射線の飛躍的増大と生態系破壊の危険性）を並存させていた。2人のアーティストが、現代において不可欠でありながら可視化されない放射線の存在に目を向けたことが、3.11以降新たな意味をもつことになった。